

# 大賞 白墨の声

染谷祐里



私は榊まがきを好いていました。

しかし榊は恋が嫌いでした。

榊はその理由について多くは語りませんが、それは姉の情死のせいでしょう。

ピアノをやっていた、歌のうまい人でした。年の離れた姉のことを、榊はとても慕っていたのです。私も、榊の姉には度々よくしてもらっていました。甘い菓子や舶来の本などをよくくれたのです。

榊の姉には恋人がいたのですが、しかし結婚をひどく反対されてきました。榊も私もその時は中学生でしたから、彼らに助言できるほどのものを知った大人ではなかったのです。

その結果があの中の心でした。

「恋なんて」

榊は葬式で泣きじゃくりながら、隣に座る私に言いました。

「恋なんて、馬鹿者のすることだ」

そして、「僕は、恋が嫌いだ。あんなもので死ぬなんて、馬鹿だ」と続けたのです。

その頃私はすでに自分が榊を好きなことを自覚してしました。

しかし、それは隠し通すことに決めました。恋が嫌いだといい榊が、私から離れていくのが怖かったのです。

私は榊の、特にその声が好きでした。

榊の声は、白墨の声です。雪が地面に降り積もり、その量を増していくときのように、榊の声は私の領分を満たしていくのです。あるいは透きとおった夜明けの空のように清廉でした。

極めつけはその声音です。すこし硬質なのです。しかし硝子のようにどういふほどではありません。

一本の白墨のように、床に落とせば砕けて割れてしまいそうな脆さを感じさせるのです。甘つたるくはありませんが、いつだって穏やかでした。男性にしてはすこし高めのように思います。

変声期に劇的な変化を迎えたわけではなかったのでしょうか。

皆が皆、私と同じところに榊の魅力を感じていたわけでは無いでしょうが、榊はとにかく人に好かれました。親切だし、顔のつくりも確かに良いのです。すつと通った鼻筋や、切れ長の涼やかな目元などはきつと美男子の部類でした。

隣の女学校の生徒に恋文を貰う姿などを時たま見かけました。

恐らく私が知らないだけで、そのような機会は何にも多々あったのでしょうか。

そういうとき、榊は困ったように笑っているのですが、後私と二人になると途端に険しい顔つきになるのです。そうしてまたあの「僕は恋が嫌いだ」という台詞をのたまうのでした。

そういうときの榊はきまって、淡い寂寞をにじませていたのです。

榊は声楽などもやっていました。家の近くの教室に通い、歌を歌っていたのです。声楽を始めたのは姉の影響もあつたようですが、五年も続けた頃には本人もそれなりに楽しんでるようでした。

今は声楽の先生をしています。郷里を出てまで榊に習いに来ようとする徒弟もいるくらい、声楽家としての榊は高名でした。

しかし本人は私のように小説が書きたいらしいのです。

「歌なんか」

榊は泣き上戸でした。

酒を飲みながらいろいろな話をするうち、酔いがまわった榊は自然と泣き出すのです。

その頃、私たちはどちらからともなく連れだつて飲み屋に足を運ぶことが多くありました。

「僕は君のように小説が書きたいんだ」

目元を酔いと涙に薄赤く染めながら、榊は酒を口に運んで言うのです。

「僕は君が羨ましい。僕が書く小説はまるで良いものじゃないよ」

「だが、京介、おまえは歌がうまいじゃないか。おまえが舞台で歌うと皆が喜ぶ。この前作った歌だつて、とても人気だと聞いたよ」

別に慰める意味ではなく私は言いました。それは確かに事実なのです。

榊は小説を書くよりも作詞をする方が、そして作詞よりも歌を歌っている方が評価されるのです。音痴な私には、そちらの方がよほど喜ばれるべきことに思いましたが、榊はそれが不満なようでした。

私は小さな出版社の小さな雑誌に細々と小説を載せてもらっていたのですが、そう大した人気があるわけでもなく、しかし食うに困るほどでもありませんでした。

物書きというものは、榊が羨むほどいいものには思えませんでしたが、とにかく榊は小説家として世間に認められたかのようなのです。

私には聞きかじりの知識しかありませんが、人の声というのは咽頭や声帯の具合で決まるらしいのです。

ですからそれらを良いように備えた榊の声は、まさに天賦のものといえるでしょう。そんな才を持つ榊がなぜそんなに小説

を書きたがるのか、私にはよくわかりませんでした。学生時代に文学をやっていたせいもあるのでしょうか。

榊は私と同じ高等学校の文科を卒業していて、英語やロシア語が達者でしたから、舶来の歌なども教えているのです。

教えているなかでも特別に出来の良い生徒がいると言うのです。

ある日のことでした。

「僕は、歌をそんなにいいものとは思わね、自分が教えた者が上達していくさまを見ると、やはり満ち足りるような心持ちになる」

酒の杯を傾けながら上機嫌に言います。聞けばそれは女学生だということでした。

私はそれを聞いて、その学生がうらやましくなったのです。もとより男同士では結婚などできるはずもないのですが、こと私と榊の間においては、気持ちをかち合うことも無論できないのです。なぜなら榊は恋を嫌っているからです。

榊に恋をしていることが知れたら、きっと私は榊に疎んじられてしまいます。

榊は恋が嫌い、ということはやはり女性もあまり好きではなかったのですが、一通りだけ例外がありました。

町中をぶらぶらと歩いているときや、飲み屋で雑談をしてい

るとき、榊が女をじつと見つめることがあったのです。

それは、きまつて、髪の毛の長い色白な女でした。

榊の姉と似ているのです。

そうして私は榊に思いを告げないまま、榊は姉を忘れられないまま、生まれて二十四度目の秋を迎えました。

それから私と榊の関係は相変わらず、下町の飲み屋でとりとめもない話をしたり、互いの家で本を読んだり、榊は舶来の歌を歌ってくれたりしました。

榊はしがない小説家である私とは違い、多忙でしたから、その時たまの休みが安らぎの時間でもあったようなのです。

ある薄曇りの日に、榊はめずらしくその眉根を寄せて私に相談することがありました。

「頌子しょうこさんは、もしかしたら僕があるのかもかもしれない」  
頌子さんとは、件の女学生でした。

私は、どきりとしました。

普段の榊なら、そんなことは日常茶飯事のように受け流すはずなのです。

しかし榊は例のように「僕は、恋が嫌いだから」と私にこぼしながら断りの文句を考えるわけでもなく、どこかぼつととしているように見えました。

平素と様子が違うように感ぜられるのです。なにか思い悩んでいるようにもみえます。

ついにこのときが来たか、と思いました。

その日、榊は深酒をしました。不安を抱えているときの悪い癖です。

「飲み過ぎると喉に悪いだろう」と私が言っても、「喉なんか」と言つて酒を運ぶ手を止めません。そして泣くのです。

呂律の回らない舌で何事かをつぶやいているようなのですが、既に正体なく酔っていました。

「すこし……手洗いへ、いつてくる」

よろよろと足下もおぼつかない様子でしたが、慣れた店なので大丈夫だろうと思ひ私は榊を見送りました。ひとりちびちびとグラスに口をつけます。

すると、誰かうしろから私の袖を引くものがありました。

一人の女性でした。

年の頃は十代の終わりかそのくらいのように感じます。女性は伏し目がちに、すみません、と言つて私に頼みごとをしました。

手紙を頼まれてほしいというのです。死角から機会を伺つていたのでしようか。それは榊への手紙でした。

私が承諾すると、女性は顔を明るくさせて、ありがとうございます、よろしくおねがいたしますと礼をして去りました。

鈴を転がしたような声色でした。

薄桃色の封筒に——仮にこれが浅葱や檸檬色だとしたら別

だったのかも知れません——私はなにかただならぬ配を感じていました。裏には「室生頌子」と名前が書いてあります。

私はすべてを察しました。

いや、本当はその姿を一目見たときから、気がついてはいたのです。

頌子さんは、髪が長く、色白でした。

榊が悩んでいたことにも合点がきました。

簡単な手紙のようで、封筒の口は折られているだけです。そして、ふらふらと封筒に手を伸ばした私は、最低の男でした。

手紙を見たのです。

酔いだけが理由ではなく小刻みに震える指先で、薄桃色の裂け目を開きます。

中身はやはり、恋文でした。時候のあいさつにはじまり、声楽を習っているうちに榊を好いてしまったこと、よければ交際をしてほしいという旨が書かれていました。

そして、返事が好いものならば、そこへ来て欲しい、と日付と場所が記されていました。断りの場合は来ないでいい、そのときは私のことは忘れてください、と。その言葉で手紙は締めくくられていました。

そして私は、人間は外道にも何にでもなれる生き物だと確かにわかりました。私はそのとき、最低の悪人でした。

榊が手洗いから戻ってくるのを見て、手紙を自分の袂にねじ込んだのです。とっさでしたが、だからこそつまりそれが私の本心だったので。

榊は少し酔いもさめたような顔つきでした。しかし先程まで泣きはらしていた目元は、未だに朱色をとどめています。

榊は私の顔を見て、なにかあったのか、と尋ねました。

私はいいや、と答えました。少し飲みすぎただけだ、と。

その日、家に帰ってから三日間、原因不明の熱が続きました。

ほんとうのことを言えば、私は罪悪感でいっぱい、いつそのまま死んでしまいたかったのです。ほんとうに馬鹿なことをしました。榊は女と結婚する方が幸せだったのかもしれないのです。しかもそれが逢いたい人の面影を持っているなら尚更です。それを、私は、自分勝手な思いのために台無しにしてしまったのです。

私は榊にとつて害悪なのでした。

そういうことを考えると体は重く、布団から出るのには用を足すとき、といったくらいで、私は顔も洗わず、ひげも伸び放題といった様子でした。いつそのまま自殺してしまおうかという考えが日に何度も頭をよぎりました。何日もそういうことばかりで頭をいっぱいにしました。

しかしずっとそうしているわけにもいきません。

私は原稿を書かなければなりません。熱が引き始める頃には布団からのそのそと這い出て仕事をしました。

そうしているうちに、ある日榊が家を訪ねて来たのです。

榊ははにかんで言いました。

「散歩、いこう」

引きこもっている私を見かねたのでしょうか。

ほんとうは私が榊に合わせる顔などないのです。そうして榊は続けました。

「恋はしないつもりだけでも、一人は寂しい」

榊はするのです。榊は何も知りません。私はまたつかず離れずを保つために、一生努力をしなければならぬでしょう。……いや、ほんとうは、私は榊から離れてしまった方がいいのかもしれない。

なぜなら私は榊の可能性を邪魔するからです。

私と榊は足任せに歩きました。晩秋の公園は今にも枯れ落ちてしまっような葉をつけた枝々に飾られています。

「……頌子さんは教室をやめるらしい」

私は心臓を掴まれたようにどきりとしましたが、努めて平静を装って、そうか、とだけ言いました。

「母親の病気が悪くなつて、郷里に戻るそうだ」

それを聞いて安堵している自分があるのを、私は気づいていました。

頌子さんは榊に手紙の話をしなかったのです。榊は手紙を読んでいるのですから、あの場所には行かなかったはずでしょう。そしてあの手紙には、断りの場合は私のことは忘れてくれ

などと書いてあったものですから、私は榊一人だけでなくもう一人分、人生の道筋を狂わせてしまったのです。

澱のように心の底にたまるものと夕闇が薄墨色を深めていくなか、枯葉がはらりと落ちました。

そんな相も変わらない生活を繰り返して、榊も私も三十を目前に迎えた頃です。私に結婚の話が降ってきました。

「あなたもいい年頃だし、香ちゃんもほら、氣立てのいい子だから」

叔母は快活ですが少々強引さのすぎるところもある人でした。それでも会ってみようという気になったのは、香さんが声楽をやっていると聞いたためです。

そのうえ、実際会ってみると彼女の声は少し榊に似ていました。

女性にしてはやや低めの声です。だからといって野暮ったいということはなく、夜明けの水平線のように、まっすぐ通る涼やかな声なのです。

何度か会ううち、私たちは次第に親しくなってきました。彼女がその榊に似た声で「宗一さん」と私を呼ぶたび、彼女は榊でないのに榊と恋愛をしているような、そういう擬似的な感覚を引き起こすのです。

何度思い返しても、私はただの馬鹿でした。

結局香さんとは結婚することになりました。

私の三十間近という年齢や世間体もありましたが、彼女も彼女で結婚について周りにうるさく言われていたようなのです。

それに、なんだか彼女は、私の榊への思いに薄々気付いているような気がしてなりません。三人で食事に行ったり出かけたたりすることは何度かあったのです。彼女が気づいているという明確な根拠や証拠はありませんでしたが、往々にして女性というものはそういうところに敏感なのを私は知っていました。

正直に言えば、私が結婚をすることで榊が私を恋しく思い、寂しがることがあるのではないだろうかと考えたのもあります。

要するに構ってほしかったのです。まえまえから気づいてはいましたが、榊のこととなると、私はものを考えるのが下手になってしまっていました。

式はそう大々的というわけではなく親類や近しい友人らを集めるのみに留めました。香さんもそう華々しい様は望みませんでしたので、式も披露宴もわりかし質素に、ただ食事の質のみを特別豪勢にして挙げました。

宴もたけなわ、というころ、榊は私の隣に座っていました。

酔っていました。

酔いと涙に目元を真っ赤に染めて、そうして呂律も怪しい舌で、「ぼくはおまえのことをほんとうに好いているから、おまえがしあわせでほんとうにうれいし」などと言うのです。

榊はずるいのです。ひどい人でした。榊が私の気持ちを知っていたとしても、無論知らなくとも、こればかりはずるいのです。

私は何も返すことができないからです。そのうち酔いつぶれて寝てしまった榊の寝顔は、学生のころ、女性に告白された時と同じ、あの淡い寂寞を漂わせていました。

それから何年か経っても榊はずっと独り身でした。

あのとき私が手紙を渡していれば、なにか変わっていたのでしょうか。しかし今更それを考えたところで詮無きことです。

榊と私はその後も変わらず、下町の店に飲みになど行ったりしました。榊は年をとっても相変わらず見目いい男でしたから、よく女学生などにも声をかけられていました。

「恋なんてするもなんじやない。恋をするとね、死んでしまうよ。だから貴女方も気をつけなさい」

グラスを片手にそういうことを言うのですが、うんうんとそれを見つめる女学生の目は既にとろけているのだからおかしなものです。

そして榊は六十で死にました。肺の病気だったのです。葬儀は昨日終えてきました。白い花々に囲まれた榊は、あの

ときと同じ、淡い寂寞をにじませていました。

榊は恋が嫌いで、恋に死ぬなんて馬鹿だと言いました。

私は馬鹿な男なのです。

私は、もう一度だけでいいから、あの白墨の声で名前を呼んでほしいと、そう願わずにはいられないのです。

体が震えた。

これは遺書だ。

気づいた途端に、鳩尾のあたりがぎゅつと締め付けられたような気持ちになる。文末には年と日付が記してあった。祖父の命日と同じ日だった。

これはきつと、祖父の遺書だ。そして絶対に届くことのない恋文でもある。最初は書きかけの小説かと思った。

祖父は、あづまそういち吾妻宗一は作家だった。

ぼた、と手の甲に水が垂れた。雨ではない。今日は炎天の盛夏だ。

水滴は自分の目から流れていた。泣いていたのだ。

庭に出した一斗缶で、納屋の古紙類を焼いてしまう予定だった。

腰を悪くした祖母に中の整理を頼まれていたのだ。

—— といつてもそこは置き場に悩むようなものを入れておく場所  
だったから、とりたてて大切なものはないはずだった。

—— 祖母はこれの存在を、知っていたのだろうか。

—— 一陣の風が背後から吹く。紙の束は自らそれを選んだかのよ  
うに、一斗缶の炎の中に埋没していった。

—— 視界がぼやける。うごめく炎が紙片を舐め、消化していくの  
が生理食塩水の膜を通して網膜に映った。

—— そうして、祖父と、見たこともない祖父の想い人のことを考  
えた。

—— 祖父はしあわせだっただろうか。しあわせだったなら、それ  
はそれで良かったのだろう。祖母をおいていったことはともか  
く。あの世で彼と笑っているだろうか。笑っていればいいと思  
う。

空は快晴、雲一つなし。

—— 盛夏はいまだ終わりの気配をうかがわせずに、今日も僕らを  
包もうとする。